

『福建省における女性の生活と女神信仰の歴史』

徐曉望

福建社会科学院歴史研究所研究員

福建師範大学閩台区域研究所兼職研究員

福建の女神研究は、早くは二〇世紀の二〇年代に始まる。中山大学語文歴史研究所の顧頡剛、容肇祖の両氏による『天后』に関する論文や、魏応麟による陳靖姑研究などは、一九二九年に編まれた『福建三神考』に集められている。しかし、この研究はさまざまな原因によってついに継続されることはなく、一九七八年の李献璋氏の著書『媽祖信仰研究』が発表され、次第に中国大陸と台湾で閩・台女神研究のブームが起こるまで待たねばならない。台湾には劉石吉、蔡相輝、林美容、張琦などの各教授がおり、福建には朱天順、徐曉望、葉明生などの人がいる。筆者の研究は特に福建における伝統社会の特徴から、福建の女神崇拜を検討するというところに力点を置いている。この方面の著作に『福建民間信仰源流』、『澳門媽祖文化研究』などがある。福建女神信仰の特徴は福建における古代社会の女性の生活から探求すべきであると考えている。

一、福建古代の溺嬰（まびき）習俗の女性の地位に対する影響

福建の古代社会における社会的地位を探るには、まず古代福建の溺嬰の習俗に対する理解が必要である。筆者は1988年の論文『福建古代溺嬰習俗嬗変考』でも指摘したが、古代中国は「重男軽女」の世界であり、男子の嬰兒は祖先の祭壇を継承する「種」と見なされ、手厚い保護を受けていた。古代福建の溺嬰の習俗は、主に女子の嬰兒をまびくことに体现されている。宋代の福建においては一部の地域でまだ男子をまびく現象があったとは言え、明清期に至るまで、福建の各地では男子の嬰兒の扶養を重視しており、この習俗の長期にわたる継続は、必然的に福建各地における男女比の均衡の崩壊を招くこととなった。現在に残る数少ない統計数字によると、明清期の福建各地の戸籍はいずれも「男多女少」で、男子の数は女子の二倍以上になっている。このような状況は必然的に福建社会の男女の地位に影響をもたらした。

古代福建で一族の同居が流行していたのは周知のことであるが、宗族は、その本質から言えば、完全に男性のために組織されたものである。宗族制度の流行は、古代中国において男性が支配的な位置を占めていたことを意味している。古代福建において女性の社会的地位がないのは、この要素によるものである。だが、福建人にとって、宗族よりもさらに重要なのは家庭であった。宗族は家庭によって組織されるので、家庭は社会の基礎細胞とも言える。宗族は家庭内部のことに干渉しないのが普通で、宗族組織は男性の社会的地位を保証していても、家庭内での地位は保証できなかった。各家庭での男性の実際の地位は、それぞれの家庭での具体的な状況によって左右されるため、女性にも家庭内で地位を築く機会を与えたこととなったのである。

溺嬰の習俗が「男多女少」の状況を作り出したことは、多くの史料が証明しているが、このような状況は古代福建において男子の嫁取りを困難にしていた。一人の男性が嫁を迎えようとするれば、高額の結納金を払わなければならない。清代の詔安を例にとれば、中流階級の家が嫁を娶ろうとするれば百両以上の金が必要で、下層階級の家だと五十から六十両の

金が必要であった。『紅樓夢』の劉ばあさんの言葉によれば、二十両の銀子があれば当時における農家の一年分の収入に当たった。これは、どの家庭にとっても嫁取りの大事業は、長年の経済的な蓄積を必要としていたということである。とは言え、女性の数が極端に少ないため、全ての男性が嫁を迎えられる機会に恵まれるわけではなく、多くの男性が一生結婚できずにいた。またわずかの人は結婚のために、心ならずも女性の家に婿入りしていた(上門女婿)。しかし、この状況は逆に、成人女性にとっては、嫁ぎ先の心配をする必要が全くなかったということである。たとえ寡婦であっても、多くの人からの求婚があった。筆者は文革時に閩北の農村で生産隊に属していた時に、隣家の子供が二十歳余りにもなる寡婦が、三十歳余りの男性に娶られて行ったのを実際に見たことがある。人々がこの男性になぜ四十過ぎの奥さんを娶ろうとするのか尋ねたところ、彼の答えは「彼女はまだ生める(まだ妊娠能力がある)」ということであった。別の例を挙げれば、同じ村の男性は目の見えない奥さんを迎えていた。これらの例の見聞は、筆者に農村の婚姻制度に対する得がたい体験を与えてくれた。福建の農村の男性が嫁を娶ることの困難さはこれらのことから分かるだろう。そのため、彼らは女性を重視せざるを得ず、ひいては家庭内での地位を与え、嫁いできた女性をたえず大切に労わったのである。

二、古代福建における女性の労働習俗

『周礼』などの書物によれば、古代中国の女性は田畑での労働には参加せず、彼女たちは家事労働や紡績業を主としていた。唐宋後の文献によると、南方の習俗は北方のそれとは異なり、当時の南方少数民族の間では、女性が田畑での労働に加わるのは普遍的なことであった。この習俗は今もなお福建の少数民族の間に見ることができ、福建のショー族の女性は田畑で働き、山で薪を刈り、家に戻っても家事を切り盛りしていた。その労働の比重は北方の女性とは比較にならない。ショー族の男性は労働に興味を抱かず、酒を飲んで博打に興じたり、喧嘩に明け暮れたり、ほとんどが正業に就いていない。古代の文献によれば、福建の土着民は昔よりこのような習俗を持ち、彼らの男性は出家するか、放蕩するかのどちらかで、家の事はすべて女性に任せ切りであった。周知のとおり、このような習俗は、今も東南アジア一帯に流行しているが、古代福建の習俗はまさにこのような東南アジアの民俗と類似するものである。

漢族は南下した後、次第に現地の民族と互いに融合し、新しい漢族系の客家人、閩南人を形成していった。この融合は、多くの場合、今のフィリピン華人が現地の女性を娶るように、漢族の男性がショー族の女性を娶る形で行われ、新しい民族を形づくっていったのである。今日のフィリピンにおける政界の要人のほとんどが、この民族と関係を持ち、彼らはフィリピンにおいて最も活躍し、最も潜在的な発展力を持っている。ただ、彼らは華人に属さず、フィリピンに属しているだけである。古代福建の状況は今日のこの東南アジアの状況とよく似ている。北方から南下した漢族が現地の女性を娶り、新しい福建人を形成したのである。福建人の習俗はこの二つの方面からの優れた点を継承しており、彼らの男性は北方の漢人と同じように、苦勞に耐えて世に名を挙げることをよしとし、女性は、古代よりの土着民のように、身体が丈夫であり、日夜を置かない労働によく耐えた。唐宋時代の文献によると、当時の福建では男女並作の習俗が流行しており、男も女もともに田畑で働き、ともに街で商いをし、ともに海で漁までもしていた。女性がさらにしなければ

ならないことは、家事の切り盛りであった。客家地区では、貧富の別なく、女性は田畑で働いていたという。そのため客家地区では纏足の習俗はまったく流行しなかった。古代中国では、全ての地域で纏足の習俗が流行していたわけではなく、だいたい、南方の安徽、福建、広東、広西などでは、少数の上流階級の女性を除いてふつう纏足をしなかった。南京一帯で流行った笑い話に、「馬皇后の脚は一尺の長さ」というのがあるが、これは朱元璋の妻が下層階級の出で、脚の長さが男性に勝っていたことを風刺している。

三、古代福建における女性の家庭内での地位

次に、古代福建の女性の財産相続権についてであるが、女性も労働に参加するために、家産の分配も、彼女らの労働が反映する。古代中国に「緒子均分制」が行われていたことは周知のことであるが、その相続者は男性に限られていた。これは古代北方の農作業が主に男性によっていたことと関係する。しかし、古代福建においては、女性もまた一貫して相続権を有していた。この習俗は、古代福建の土着民から来たものであろう。当時の民間の習慣に従うと、子女は成人した後、分家して父母と別れ、一部の財産は父母に残し、子女は各々その一部を得る。女子も財産を得ることができるが、男性よりはかなり少ない。当時の北方では、財産相続権は完全に男性に限られており、もし男性の相続者が死亡すれば、その家族の財産はその家族に属し、その家にもとからいた女性は出て行かねばならない。中国の南北間における女性の家庭内での地位の違いが、ここからも伺えよう。

古代福建の財産相続権は嫁を厚遇するという習俗にも表れている。福建では、女性が嫁ぐ時が、その家庭の財産を輝かせるいちばんの機会であった。もし嫁入り道具が少なければ、近隣の嘲笑は個人だけでなく、その家庭にも向けられてしまう。そのため、福建人の習俗では、娘が嫁ぐ時には必ずその家相応の嫁入り道具を準備するのである。普通の家庭にとっては、嫁入り道具は結婚後の家庭用品で、家具や化粧道具一式などが一般的であるが、富裕な家庭にとって、自分たちの財力を誇示するために、「梳粧田」も娘に与えたという。その名から考えると、「梳粧田」は娘の化粧のために与えたものであろう。もちろん、その役割は化粧にだけではなく、これは女性の私有財産に属し、男性の家はみだりに触れてはいけないという意味表明をも兼ねていた。邵武などの地域の習俗では、女性は夫が死んだ後も、「梳粧田」を携えて他の家に嫁ぐことができた。

次に指摘したいのは、福建の女性は嫁いだ後も、しばしば家庭の財産を管理していたということである。中国の社会において、一般的な状況下では、家庭の日常的な遣り繰りは女性に任されているにもかかわらず、家庭の最高財産権は男性に制御されていた。しかし実際には、女性の家庭の財産に対するコントロールは、往々にして全ての家庭収入に及んでいた。このように、家庭の事務はほとんど女性が主役で、男性は家庭の脇役であった。

その次に、古代福建の女性は果敢に家庭での権力を争ったということを挙げる。「一に泣き、二に騒ぎ、三に首を吊る」が、女性が権利を争い取る時の方法であった。男性の虚栄心を利用して、泣いて騒いで男性に譲歩させ、さらには首を吊って脅しさえたのである。当時の福建では女性の自殺は珍しくなく、少しでも気に入らないことがあると、井戸に身を投げたり、首を吊ったりして自殺していた。そのため、彼女らはたびたび家庭に譲歩させることに成功していた。しかし、このように猛烈な女性はもちろん少数に過ぎなかった。多くの場合、女性は家庭の制御権を争うだけであり、いったんその権力を得ると、

彼女たちの家庭での指導力は常に男性に勝っていた。

四、古代福建における女巫の社会的作用

福建には「信巫鬼、尚淫祀（巫鬼を信じ、淫祠を尚ぶ）」の地域であり、昔より、女巫男覡は福建社会において重要な役割を演じていた。彼らは人々の生活のあらゆる方面に関わっており、およそ人はなにかの事件にであうと、そのたびに巫覡を通じて神の指示を仰いだ。そのため、巫覡は人の生死をも操ることができたのである。古代福建社会における女巫の数はかなりのもので、どの村にも数人おり、しかも、彼女たちは社会的な地位も高かった。宋代福建の地方志は女巫のことに触れる時は、どれも尊敬の口調で語られており、ふつつ女巫を冒瀆するようなことはなかった。福建の二大女神である媽祖と臨水夫人は、生前、女巫であった。彼女らは村民たちの敬愛を受け、生前にすでに崇高な威信を有していたので、村民たちの信仰の拠り所となっていた。彼女たちの死後も、村民たちは依然として彼女たちの生前と同じように彼女たちの加護を祈ったので、これらの女巫は次第に女神へとなっていたのである。福建の女神の大部分は、生前はみな女巫であるか、女巫や女道士とみなされた人であった。

五、古代福建の主要な女神崇拜

古代福建の主要な女神崇拜には、太姥崇拜、馬仙崇拜、陳靖姑崇拜、華七娘崇拜、七姑子崇拜、媽祖崇拜、螺女崇拜、黃氏崇拜、三女仙崇拜、馬仙妃崇拜、対山夫人崇拜、王義娘崇拜などがある。

日本語訳 道上知弘